

BOOK REVIEW

作業療法を創る

—この50年のナデシコ・サムライたちの挑戦

鎌倉矩子、岩崎清隆両氏による11人へのインタビューにより編纂された、『作業療法を創る—この50年のナデシコ・サムライたちの挑戦』は、作業療法の50年を振り返り、今後の方向性を示す、学生、新人、ベテラン作業療法士におすすめしたい良書である。

登場人物は、澤 治子、辰巳三代子、古川 宏、山根 寛、種村留美、藤原 茂、辛島千恵子、小川敏之、田中順子、目良幸子、石井晴美である。作業療法の誕生前から現在に至るまでの歴史の中で誰と対談を行うか、きつと2人は悩み、議論をされたことと思う。11人の選択の理由、インタビューの視点、編集、出版に至るまでの経過は「はじめに」に記してあるが、ぜひ、お目通しをいただけたら、さらに本書の良さを感じると思う。

その中で、両氏は「こうしてできあがったインタビュー記録を、今ここに、何も足さず、何も引かず、生の言葉そのままに読者にお届けする。(中略)お届けできるのは、わずか11名の言葉ではある。しかし、同時代を生きた作業療法士の方々には、彼らの声の中に、自信の声が重なるのを聞く瞬間があるのではなからうか。この50年、日本の作業療法士たちは何を感じ、何を考え、何をしてきたか。そして未来に託すことは何か。ここにお届けする記録はその答えのひとつである」と記している。両氏の思いを感じる一文である。

私自身も登場されたうちの9名の方々と、いろいろな場面で会話し、また、一緒に仕事もさせていただいているが、両氏との「語らい」は、インタビュー場面を想起させ、また、当時を彷彿させる。おそらく、紙幅の制限がなければ、それぞれ11

冊の本ができるのではないと思うほど、限られた紙幅の中で幅と深みのあるインタビューとなっている。

まえがき、第1章から10章、インタビューを終えて(対談)で構成され本書は、それぞれタイトルがつけられ、それぞれに期待を抱かせる。また、脚注に必要な知識の補完がなされ本書に深みを与えている。

本書を読み進む中で、両氏の「問いかけ」は実に「絶妙」である。なぜ、ここでこんな質問? と随所で思う場面がある。もし、自分がインタビューアだったら、こんな質問をするだろうか? と思うのである。そんな観点から読んでも楽しく読める。

インタビューを終えて(対談)の章は、11名の対談を通しての両氏の「まとめ」であるが、そのまとめ方は、まさに本書のタイトルにふさわしく、今後、50年を考える時の大切な視点であると思われ、ここに紹介しておく。

「作業療法をつくる過程はその人の人生につながっていた」「この50年は「治療主義」からの脱皮の歴史だった」「アイデンティティ・クライシスは大きな問題ではない?」「事例報告を残すこと」「書き方を修練する」「学問的な深みを増すということ」「エビデンスという問題」「臨床家たちの『物語』の意味」「このインタビュー・シリーズでカバーできなかったこと」「今後もっと光をあてたいこと—『間主観性』または『関係性』」である。13人の思いが詰まっている。

最後に、このような良書を世に出し、多くの作業療法士に元気と勇気を与えていただいた、鎌倉矩子、岩崎清隆両氏に感謝するとともに、本書が一人でも多くの作業療法士に読まれることを祈念している。



● 鎌倉矩子, 他=編

(四六判/488頁/3,600円+税/青海社/2015年)

評者

中村春基

日本作業療法士協会 会長
兵庫県立総合リハビリテーションセンター 特任顧問、作業療法士